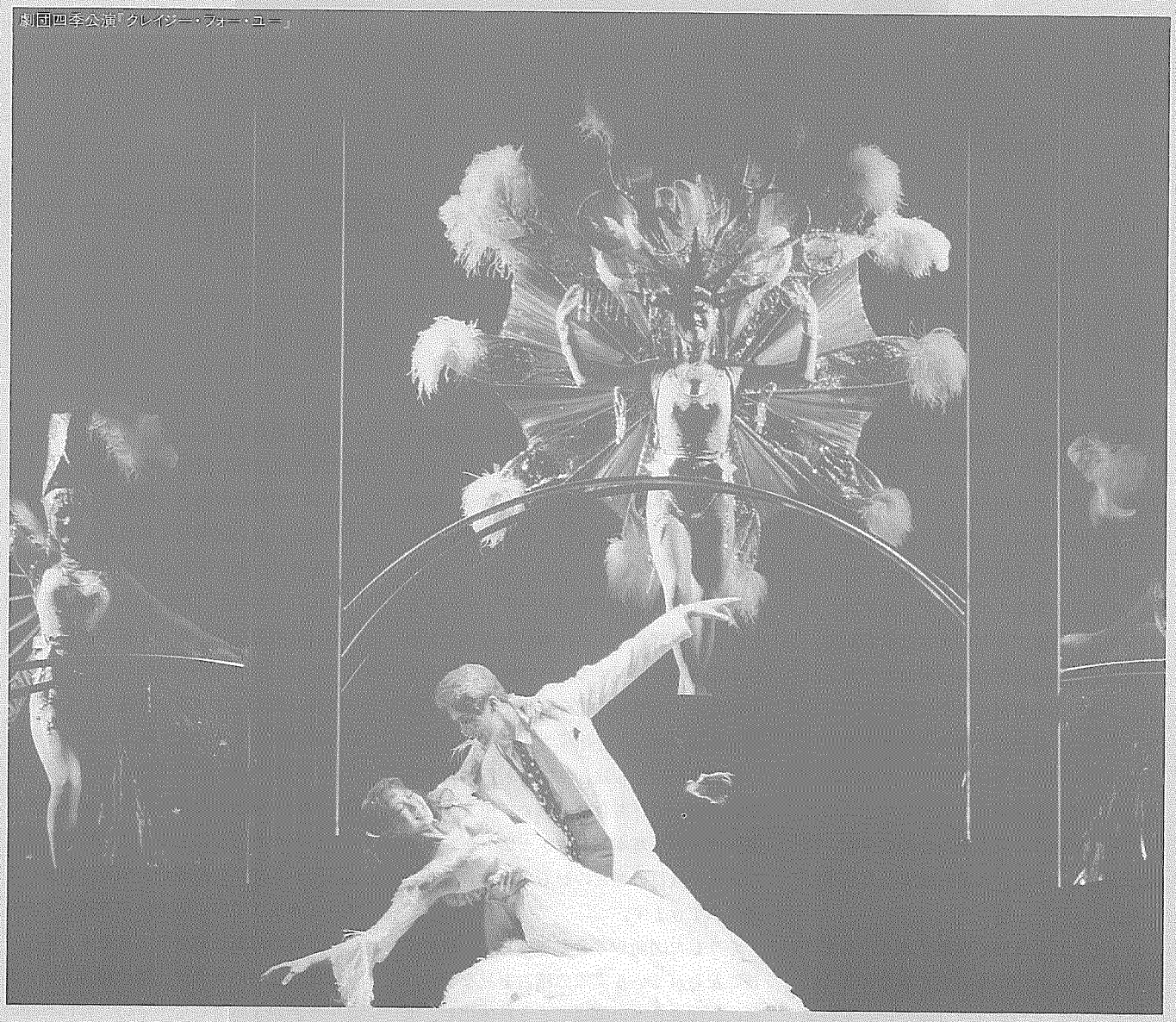
マルモ・ライティング・ニュース

MARUMO LIGHTING NEWS

劇団四季公演『クレイジー・フォー・ユー』



●『エリザベス』の舞台照明とステージポップコーンの活動――塚本 悟

●舞台照明を通して見た高校演劇――永島 実・今村憲一

1

Vol.77 1994-1

『エリザベス』の舞台照明とステージポップコーンの活動

塚本　悟(A·S·G)

東京・銀座セゾン劇場で上演された『エリザベス』(作/フランシスコ・オルス、演出/ヌリア・エスペル)は、原作、演出はもとより装置や衣裳、照明、振付をスペイン、イタリア、イギリスのスタッフが担当し、坂東玉三郎さんがエリザベスを演じるという意欲的なプロデュース公演でした。

私は日本側の照明のコーディネータとして、この作品の舞台づくりに携わることになりました。最初は、舞台照明を担当したイタリアの照明家との舞台づくりの方法の違いや、仕事を進める上でのシステムの違いなどに戸惑うこともあったのですが、反面学ぶことも多く、非常に充実した仕事でした。

そこで、この仕事で印象に残ったエピソードや、明かりづくりの上で参考になったことなどをいくつか述べてみたいと思います。

また、同時に若い舞台美術家が中心になって活動している「ステージポップコーン」という勉強会についても紹介したいと思います。

仕事の進め方

この作品の舞台照明を担当したヴィニチオ・ケリーは、ミラノ・ピッコロ座でジョルジュ・ストレーレル演出の全作品の舞台照明を担当したり、オペラやバレエなどの舞台照明も手掛けるなど、ヨーロッパ演劇界の第一線で活躍しているイタリアの舞台照明家です。

私の仕事は舞台照明のコーディネータとして、彼がデザインした明かりのプランを日本の劇場で実現するために検討を加えると同時に、実際の作業を進めていく上で必要な仕込み図などを作成することでした。

舞台照明家からは、戯曲を読み、演出家や装置家との打ち合せを通して生まれた照明デザインや基本的なコンセプトが、ラフな図面や機材の選定の形でファクシミリで送られてきます。

そうした図面や考えを基にして、日本でおこなわれている実際の稽古を見ながら、彼の意図を日本の劇場でどう具体化し、実現していくかということを考えなければなりません。

ここでは、照明家の考えやイメージをできるだけ忠実に、そのままの形で実現していけるように仕事を進めていくのですが、時にはこういうやり方がいいのではないかといった提案をすることもありますし、照明家から指定された器具が日本の劇場では使われていない場合は、劇場に備えられている別の器具で同じような効果を得るための代案を具体的に提示することもあります。

日本での稽古が進み、明かり合せの段階になると、舞台照明家も来日して一緒に仕事を進めていくことになります。

ここで少し心配したのが、彼らの普段の仕事の進め方と私たちの仕事の進め方の違いでした。

彼らは前もって緻密に準備をしておくという方法を取りません。机上のプランというのはあまり細かく立てないで、現場で実際に明かりを出しながら、細部を決めていくというやり方なのです。これでは劇場に入ってから非常に時間がかかってしまいます。イタリアではこの方法が普通ですから、そのための時間は充分とってあります。

日本では明かり合せ、舞台稽古とスケジュールが決まっていて、そのための時間の余裕もあまりありません。できるだけ事前に準備を整えておき、劇場に入ったらいかにスムーズに作業を進めるかということが重要なのです。したがって、私もできる範囲での準備を整えることに力を注ぐ必要がありました。

もう一つ、お互いに戸惑ったのが劇場のシステムの違いです。彼らは当初、オペレートやフォロースポットを操作するスタッ

フは劇場に所属していて、その中から必要な人数を使えると思っていたようです。ところが、日本の劇場の場合、一部を除いてそうした劇場付のスタッフはいません。その公演の必要人数に合せてスタッフを手配するという形がとられています。打ち合せの過程で、フォロースポットのために何人用意したらよいかといった、こちらからの問い合せの意図がなかなか向こうに伝わらなかったのも、こうしたシステムの違いによるものでした。

舞台美術について

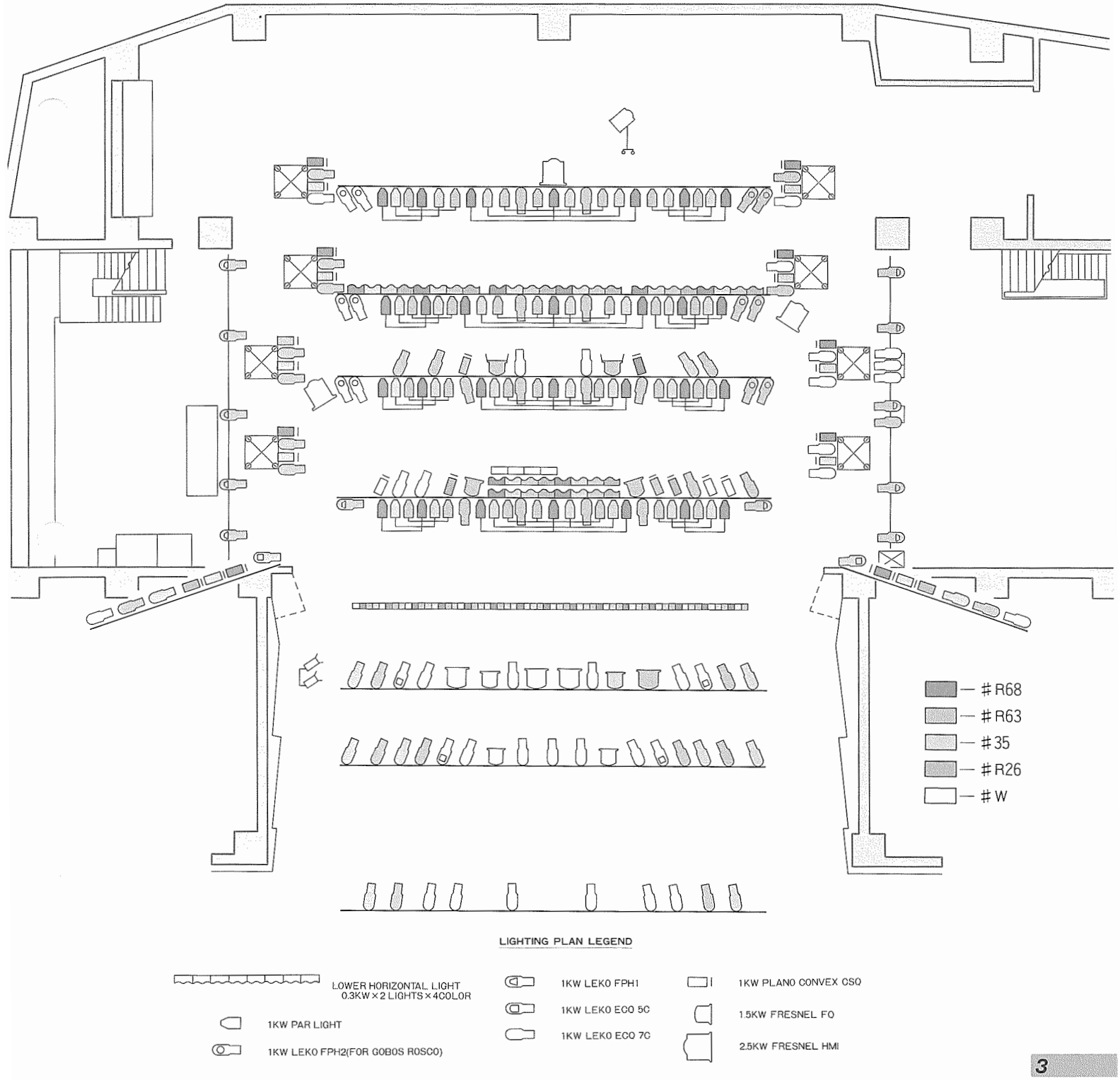
この作品の魅力の一つに衣裳や舞台装置のすばらしさがありました。

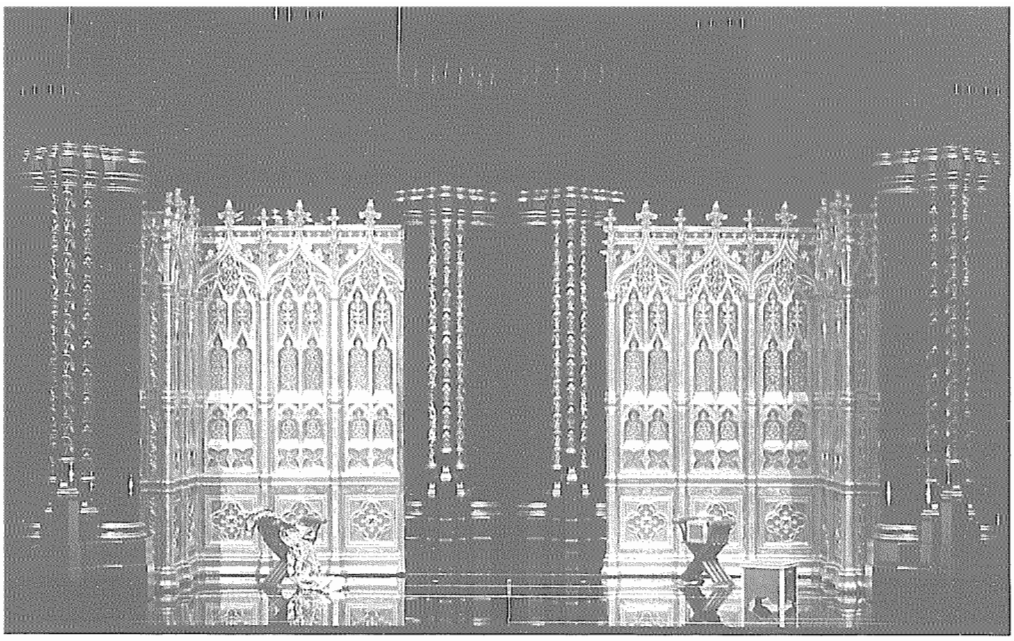
衣裳はスペイン、装置は主にイタリア、そして小道具と大道具の一部がフランスで製作されたのですが、素材の選び方、質感の表現、ディテールの細工の緻密さなど非常に優れており、そこから醸し出される豪華さ、荘厳さには圧倒されるものがありました。

舞台装置は高い円柱とワゴン、パネルで構成され、これらを使いまわすことで全14場の場面が転換されるという、ある意味ではシンプルなものです。しかし、9mにもおよぶ円柱を補助ワイヤーなしで安定性をもって設置し、しかも場面転換では数人の人力でスムーズに移動させるという設計技術、大道具の製作技術はすばらしいものでした。

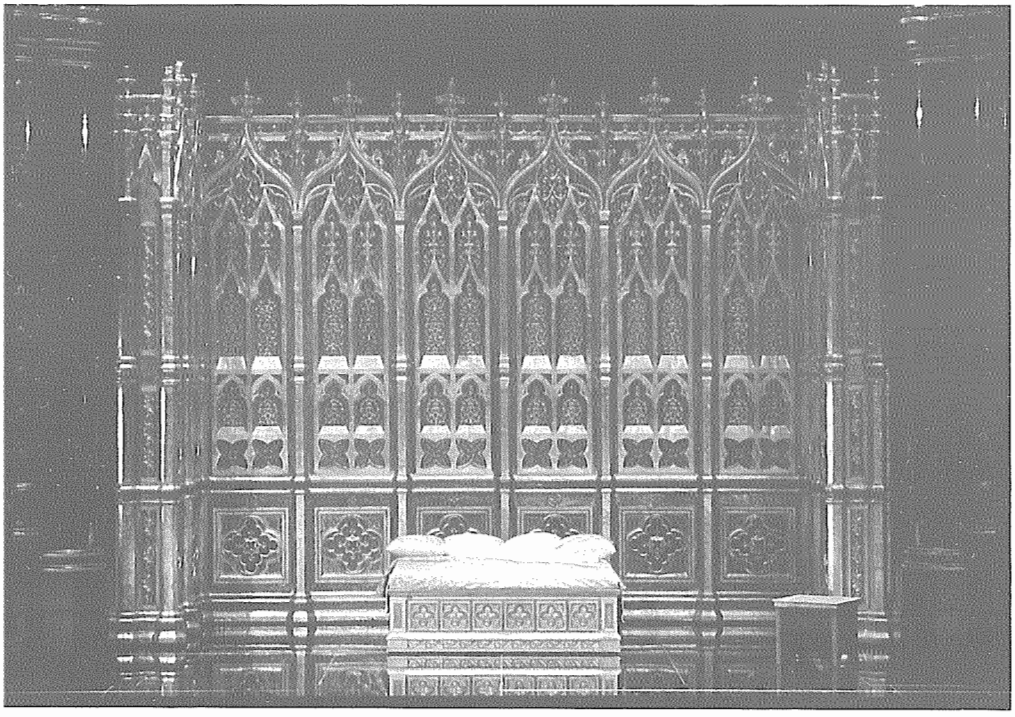
舞台転換については、当初は暗転にしておこない、観客には舞台装置が動くのを見

『エリザベス』舞台照明仕込図



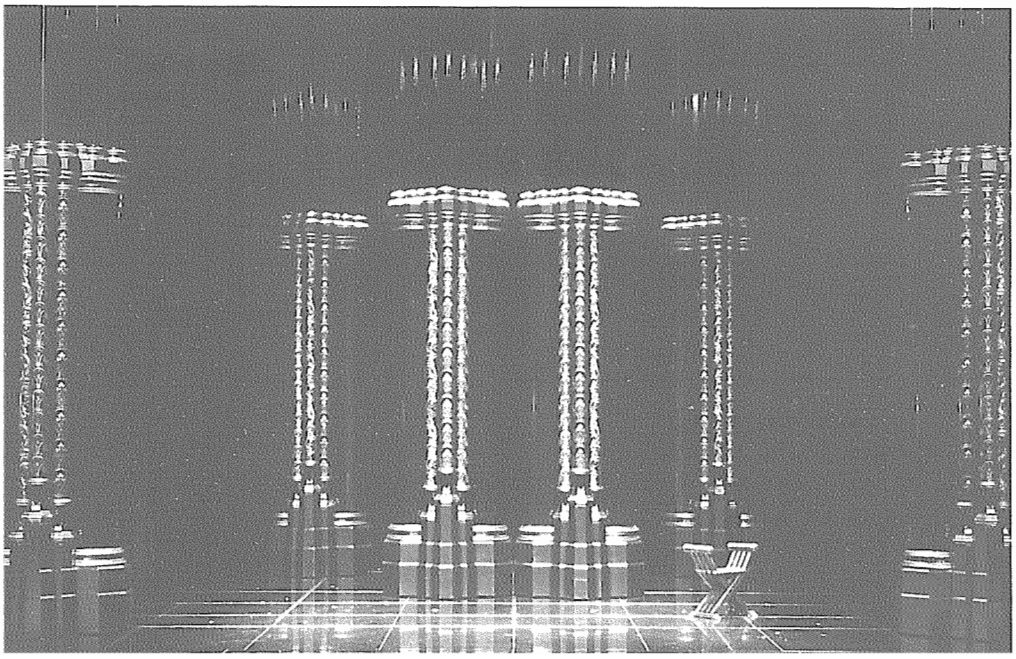


円柱とパネルで構成された舞台装置 舞台装置は高い円柱と、室内を表現するパネルによって構成されています。円柱の細部やパネルの壁面に施された精緻な彫刻の細工、またパネルの表面に張られた金色の素材など、豪華で荘厳な質感の装置となっています。また、人力でスムースに舞台転換をおこなうための技術もすばらしいものがありました。



寝室の場面 舞台正面に置かれたベッドは、客席からはダブルベッドの大きさに見えますが、実際は奥行き1.5mほどの大きさです。このベッドを大きく見せるために、前半分だけに明かりがあてられています。

円柱の装置と光沢ある床面 高い円柱の装置がさまざまに移動し、場面を変えていきます。光沢のある床面に対しては、上からの明かりによって、反射を真上に逃がすように注意がはらわれています。



せないように演出家は考えていたようです。しかし、装置家や照明家と打ち合せを重ねるうちに、本番では装置が動いて場面が変わっていくようすを、光量を少し落とした明かりの中で見せる方法が選ばれました。

転換明かりのなかで、大理石を思わせる重厚な円柱の装置が動きだし、場面が変わっていく様子は、客席から見ているとそれだけでも劇的な雰囲気を感じさせるものでした。

このように、演出家は装置家や照明家と打ち合せを重ねながら、ビジュアルな面での懸案事項を決定していました。舞台がどう見えるか、どう見せていくかというビジュアルな面については、信頼できる装置家や照明家にある程度まかせていくといった姿勢です。

今回のスタッフは何度かヨーロッパで一緒に仕事をやったことがあり、お互いの信頼関係があるからこそ、こうした理想的な形で舞台づくりができたのだと思います。

舞台照明のポイント

舞台照明では、エリザベスという人間のミステリアスな部分にシャープに光を当てていきたいというのが照明家の基本的な考えでした。

私も稽古を見ながら、この芝居にはフラッドな明かりよりも陰影をつけた明かりの方が、よりドラマの深さを表現できると思いました。

そうした考えに基づいてつくられていく舞台照明は、徹底したリアリズムの伝統が感じられるものでした。そこに差し込んでいる明かりは太陽光なのか、月明かりなのか、また、どの位置からの光なのか。そういったことが厳密に計算され、その場面の時間、場所が照明のなかで厳然と表現されているのです。

さらに、ドラマをより深く表現するために色の使い方も緻密に計算されており、場面の内容に合せて大きく分けると三つのトーンから構成されていました。

まず、エリザベスが執務をおこなったり人々と語らったりする場面、普段のエリザベスの姿に対しては、アンバー系の明かりでその場面のトーンがつくられています。

そして、このドラマで最も緊迫した場面、エリザベスが本当は男性であったという事実が明らかになり、エリザベスの苦悩が表

写真撮影＝矢吉守正彦

現される場面ではブルーのトーンで明かりが構成されています。

最後に、愛する人を次々と失なったエリザベスが、それでも女王として生きていこうと決意する場面、絶望と苦悩の果ての未来を象徴する幕切れの場面は、その情熱を表わすような真赤な明かりのトーンによって表現されていました。

奥行きを感じさせるために

この作品ではエリザベスの寝室や、レディー・キャロラインの寝室の場面で、舞台中央にベッドが置かれ、その上で芝居がおこなわれるシーンが何度かありました。

客席から見るとこのベッドは広いダブルベッドの大きさに見えるのですが、実際は奥行きが1m50cmくらいの狭いベッドです。

ここではベッドの前半分だけに光を当て、奥行きを出すように明かりがつくられていました。このベッド全体に光を当てたり、ベッドの後にある壁面の装置に光を当てると、舞台の全体の奥行きがなくなり、ベッドは非常に小さく見え、芝居が不自然になってしまうからです。

しかし、ベッドの前半分だけの明かりでは、その上で芝居をする役者の顔が暗くなり表情が見えづらくなります。演出家からも光をもっと当てて欲しいという要望がでました。

この時に照明家は、ベッドを大きく見せ、舞台の奥行きを出すためにはこの明かりでなければならないということを熱心に演出家に説明し、理解してもらい、さらに役者にはその明かりの中で演技をして欲しいと要求していました。

今回、一緒に仕事をして強く印象に残ったのは、照明家がプライドとポリシーをもって明かりをつくっていること、そして、その明かりの意図を根気よく演出家やスタッフ、役者に説明し、その上で理解と協力を求める姿でした。

ですから、舞台稽古などで明かりの部分から役者がはずれたり、小道具の置き位置がずれて明かりの外に置いたりすると怒りだす場面もありました。それほど、自分の照明にプライドを持ち、この芝居の明かりはこうだという信念をもっているのです。

光沢のある床面に対して

今回の舞台照明を考える上で一番の問題点となったのは、舞台装置として床面に光沢のある素材が使われていたことでした。この床面に照明を当てると光が反射し、ハレーションを起こしてしまいます。こうした素材を舞台で使うことは、これまでは避けられていたのですが、この作品では美術的な意図からあえて使われることになりました。

これは、舞台照明の面からみると、一つのチャレンジであったと思います。

この床面に対しては、基本的には真上から光を当て、反射を真上に逃がすように考えられました。斜めや後からの明かりを使うと、反射によって全体の照明効果が損なわれてしまいます。特に客席側への反射は避けなければなりません。

しかし、真上からだけの明かりでは役者の顔がどうしても暗くなってしまいます。前からの明かりもある程度は必要です。また、立体感を出すためにサイドからの明かりなども必要になってきます。そうした明かりの微妙なバランスが要求された舞台でした。

顔が暗い場合はフォロースポットも使われましたが、これも人の動きと一緒に明かりが動くフォロースポットを演出家が好きではないということもあり、できるだけ目立たないように、しかも顔が暗くならないようにフォロースポットを使っていました。本当に出ているのか出ていないのかわからないほどの明るさでフォローをしていたのです。

ステージ・ポップコーンについて

最後に「ステージポップコーン」の活動について少し紹介します。

「ステージポップコーン」というのは、若い舞台美術家が中心になって、舞台表現の可能性について考えたり、舞台で用いられる技術やさまざまな素材についての理解を深めるためにおこなわれている勉強会です。

第3回目の今回は、銀座セゾン劇場の協力を得て『エリザベス』の舞台美術が取り上げられました。

海外のスタッフによってプランニングされ、製作も海外でおこなわれたこの作品の舞台美術は、〝舞台美術について〟のところでも述べたように、とても刺激的で、考えさせることの多い作品でした。

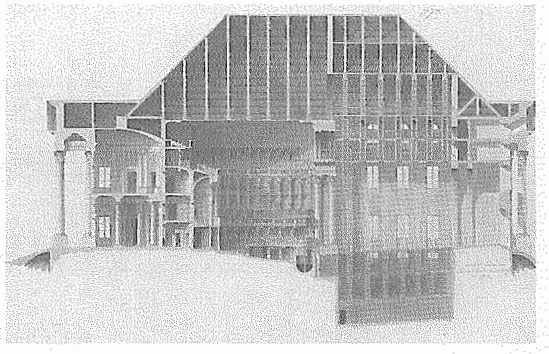
この勉強会では、海外スタッフのコーディネータとして舞台づくりに携わった日本側のスタッフ（装置、小道具、照明、舞台監督）が出席し、実際の舞台を再現しながら『エリザベス』の舞台美術や舞台照明のポイントが解説され、製作過程の様子なども具体的に紹介されました。

このステージポップコーンに参加した舞台美術家や舞台照明家をめざす学生や若い人たちにとっては、とても参考になったのではないでしょうか。また、参加者は実際に『エリザベス』の装置が飾られた舞台にのぼり、装置の裏側や小道具、衣裳などを間近かに見ることもできました。こうしたことも、これまでほとんど機会がなかっただけに貴重な経験だったと思います。

私も舞台照明のスタッフとして出席し、これまで述べてきたようなことを話したのですが、こうした試みが今後も息長く続けられるように期待したいと思います。

エンドレスワークショップ ステージポップコーン 『エリザベス』の舞台美術

日時1993年8月13日(金)p.m.14：00〜p.m.16：00 入場無料
場所 銀座セゾン劇場



①挨　　拶・(石井　強司／日本舞台テレビ美術家協会セミナー委員会・委員長)
②作品概要説明・(小山内秀夫／銀座セゾン劇場・技術部長)
③デモンストレーション・「エリザベス部屋」／「キャロライン部屋」／「野外」／「舞踏会」
④解　　説・小山内秀夫／島川とおる／塚本　悟／田中　義彦／三上　司
⑤見　　学・観客舞台上自由見学
⑥挨　　拶・(畑尾　幸男／日本舞台テレビ美術家協会セミナー委員会・事務局長)

(1)出演者：小山内秀夫（銀座セゾン劇場・技術部長）
島川とおる（舞台美術家・「エリザベス」装置コーディネイター）
塚本　悟（舞台照明家・「エリザベス」照明コーディネイター）
田中　義彦（小道具製作・「エリザベス」小道具コーディネイター）
三上　司（舞台監督・「エリザベス」舞台監督）

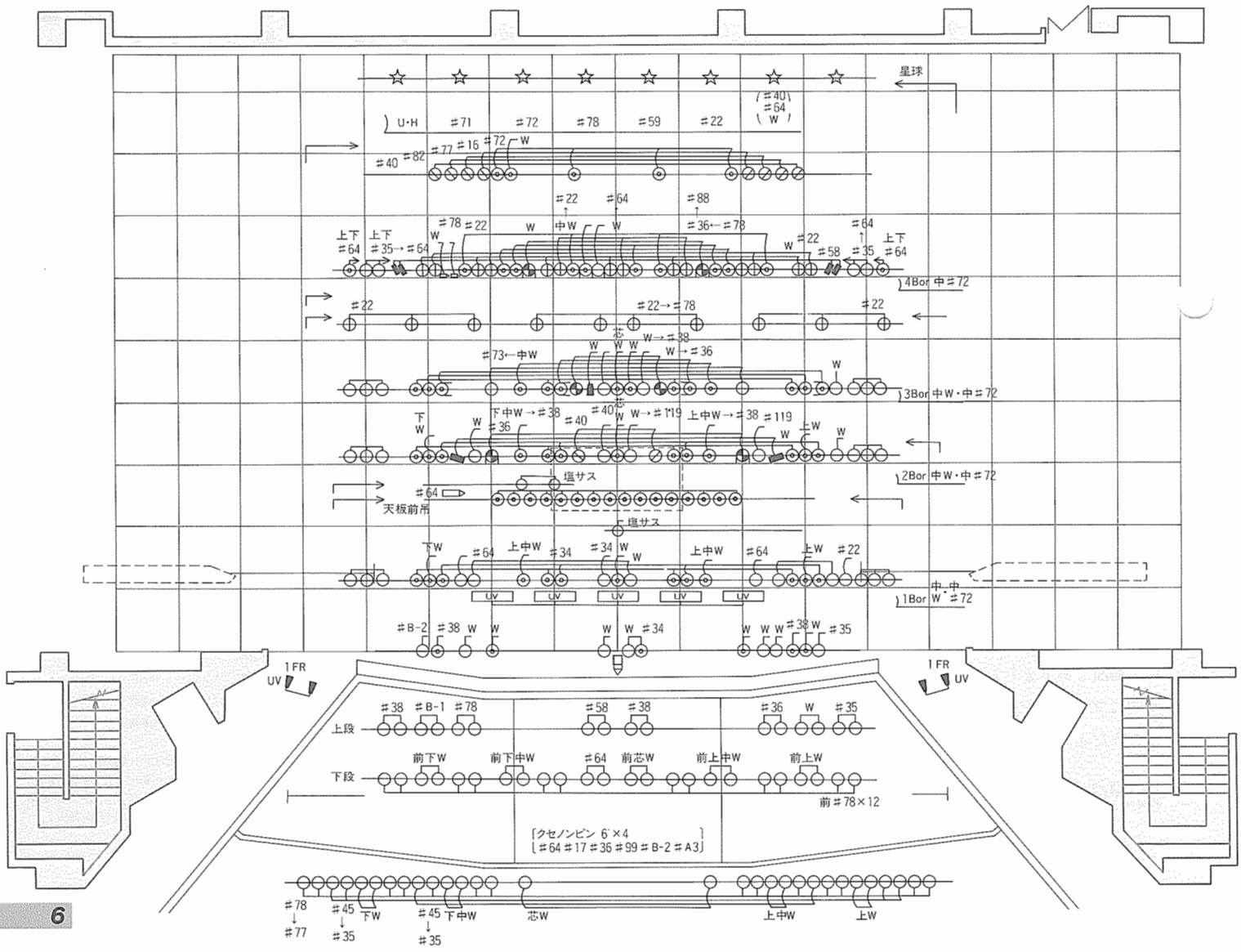
問い合わせ：日本舞台テレビ美術家協会セミナー委員会
〒150 東京都渋谷区恵比寿1－8－14 第二公団ビル715
TEL・FAX 03-3280-4940
「エリザベス」公演問い合わせ：銀座セゾン劇場　03-3535-0555

舞台照明を通して見た高校演劇

全国高等学校演劇大会の舞台照明づくりに携わって

永島　実（中央舞台サービス）
今村憲一（フジライティング アンド テクノロジィ）

図1　総合仕込図(1)



出場校との打ち合せ

8月6日から8日までの3日間、埼玉県浦和市の浦和市文化センターで全国高等学校演劇大会が開催されました。

今年の大会は会場に入りきれない観客も出るほどの活況を呈し、舞台では県大会、地区大会を経て全国大会に出場を果たした11校の演劇部が、それぞれ熱のこもった独自の作品を展開してくれました。

私たちは舞台照明のスタッフとして出場校の舞台づくりをサポートし、これまで創りあげてきた作品をできるだけ生徒たちの意図にそったかたちで再現できるように仕事を進めていくことになりました。

このために全国大会の開催に先立つ4月の初め、まず出場校との打ち合せがおこなわれました。

この打ち合せでは、会場となる浦和市文化センターの照明設備に合わせた舞台照明仕込図を制作するために、各学校の担当者から必要な資料を提出してもらい、舞台照明についての要望などを聞き、不明な点を確認することが主な仕事になります。

全国大会の場合は、すでに県大会や地区大会で何度か上演を重ねた作品を上演するわけですから、仕込図やキューシートなどがつくられていたり、どんな明かりが欲しいのかということも比較的はっきり提示してもらえることが多いようです。

しかし、この打ち合せも1日に11校全ての担当者とおこなわなければならず、絶対的に時間が足りないこと、また提出してもらった資料が一生懸命にまとめられているのはわかるのですが、その意図を伝えるには的確でない場合があったりと、なかなか大変な仕事になりました。

それはともかく、打ち合せでの資料や確認事項を基に、それぞれ11校分の仕込図を作り、さらにそれをまとめて総合仕込図を制作しました。(図1～2)

出場校の意向にそって、できるだけ忠実に明かりをつくるように仕込みを考えましたが、全てを希望通りというわけにはいかず、了解を得てカットした部分もあります。それでも、仕込図でもわかるようにその量はとても多くなりました。また、休憩時間中の色換えや当り換えの作業も多く、ステージでの仕事は大変なものになりました。

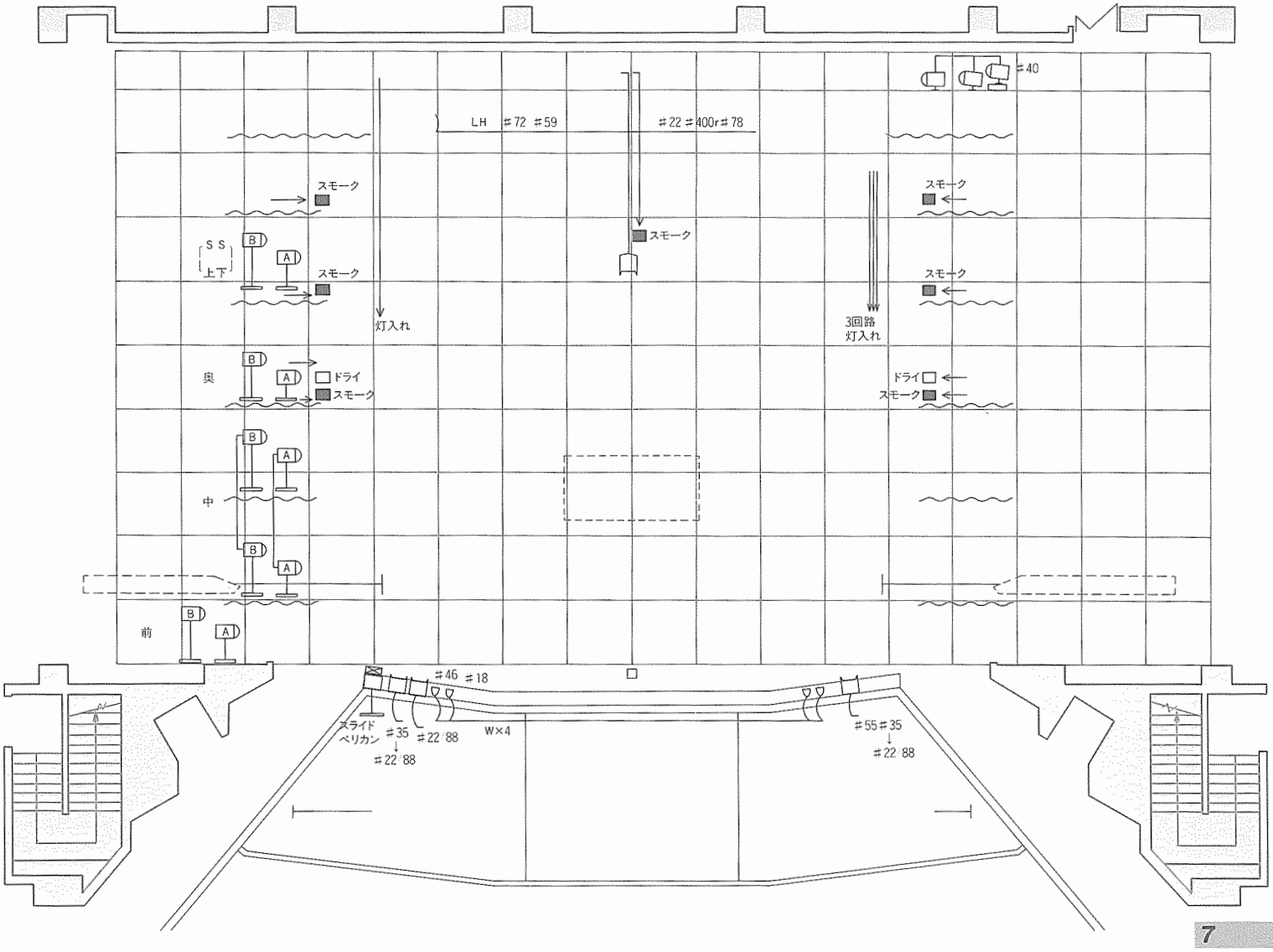
舞台照明の意図をどう伝えるか

私たちにとって、4月におこなわれた打ち合せで生徒たちの意向をできるだけ正確に把握することは最初の重要な仕事のひとつでした。

全国大会の場合は通常の仕事のように稽古を観たり、何度もスタッフとの打ち合せを重ねたりできません。ここでのお互いのコミュニケーションがうまくいかないと、本番までの仕事がスムースに進みませんし、不本意な舞台成果につながりかねません。

短い時間の中で、私たちも真剣でしたし、生徒たちにとっても自分たちの舞台づくり

図2　総合仕入図(2)



の意図や欲しい明かりをどう私たちに伝えるのか、ということが大きな課題であったわけです。

各学校から提出された資料は、仕込図、キューシート、舞台装置の平面図と立面図などです。しかし、これらは全て完全にそろっていたわけではなく、非常に良くできているものもあれば、わかりづらいもの、仕込図やキューシートが書けないために自分たちで工夫してその意図を伝えようとしたものなどさまざまでした。

その中でこれは有効だなと思ったのは、群馬県共愛学園高校が資料に添えてきた写真でした。この学校の作品では舞台上部から塩（実際は発泡スチロールの粒子）が降るシーンがあるのですが、一筋の流れのように降る白い塩をどう見せるのかというのは、舞台効果としても重要なポイントでした。

生徒たちにとっても力を込めたいこの場面で、降り続ける塩に当てるサス明かりの角度や色、舞台全体の雰囲気、そこから醸しだされるイメージなどを言葉やデータで伝えるのは難しいと判断したのでしょう。「こんな明かりが欲しいのです」と、地区大会などで上演した際のその場面の舞台写真を他の資料と一緒に見せてくれました。

この写真で生徒たちの意図はよくわかりましたし、本番では塩を降らせる仕掛けもうまくいき、明かりの効果を伴ってとても美しいシーンになっていました。

言葉やデータで自分たちの欲しい明かりやイメージを伝えるのは難しいことです。特に、データの書き方を熟知しておらず、経験や知識も十分でない高校生にとってはなかなか思い通りにはいかないでしょう。そうした場合、写真というのは役に立つのではないかと思います。それは今回のようにすでに上演した舞台写真はもちろんのこと、自分たちのイメージを伝えてくれる写真、たとえば雑誌などで目にした風景写真などを活用することもできるでしょう。

次に各学校から提出された資料の中から、岡山県児島高校の資料の一つを紹介します。

この学校は階段状の装置と金属性のフレームを使って、非常にシンプルで洗練された舞台を創っていました。

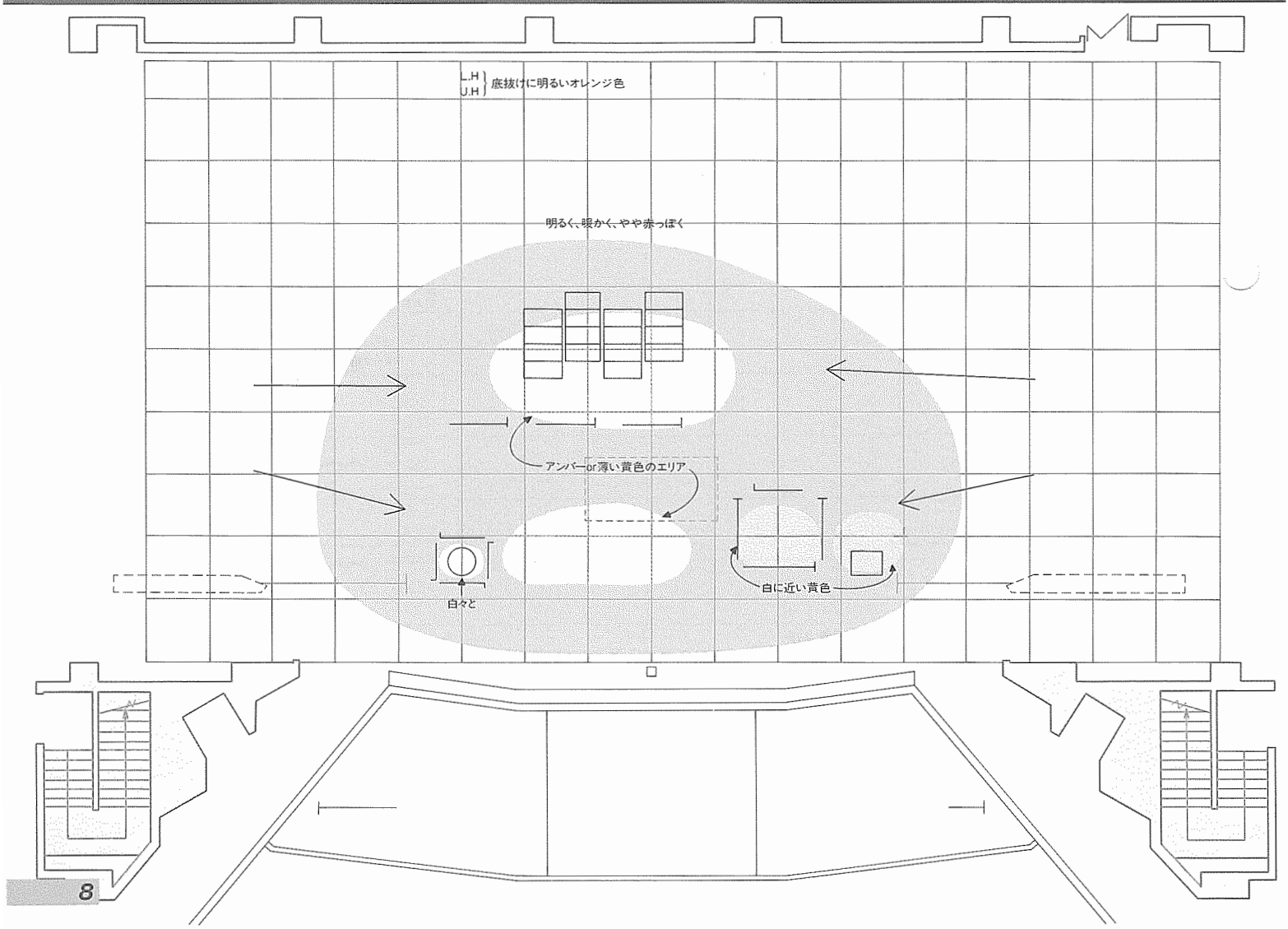
図版の3は、ある場面の照明の当るエリアを平面図に描き入れたものです。その明かりの色についても書き込みがあります。

この図版は、私たちには当りの確認という参考にはなるのですが、それよりも演技をする生徒にとってより意味のあるものに思えます。自分がどの位置で、どういう明かりの中で演技をするのか、舞台の上ではなかなか客観的に舞台全体と自分の位置を把握するのは難しいものです。

こうした図版を描くことによって、自分たちの位置や動きを改めて確認し、舞台を客観的に見ることができます。また、どんな明かりがどういう見せ方をするために舞台上で使われているのかということを、照明や演出の担当者だけでなく、その芝居づくりに参加している一人一人が理解するための手助けにもなります。

図面を描いたり、データなどの資料をつくることは、人に伝える以前に、自分たちのやっていることを整理し確認するという作業でもあるのです。

図3　照明当りの指示図



そうした意味からも、日頃の活動や稽古の過程でも図面を描いたり、データにまとめてみるといったことは意義のあることだと思います。

図版4は埼玉県秩父農工高等学校の仕込図です。

こうした大会には何度も出場した実績のある学校ですので、仕込図もよくできています。

また、仕込図に添えられていた「照明当り　説明書」（図5）は伝えたいことが具体的に、的確に書かれていて感心しました。

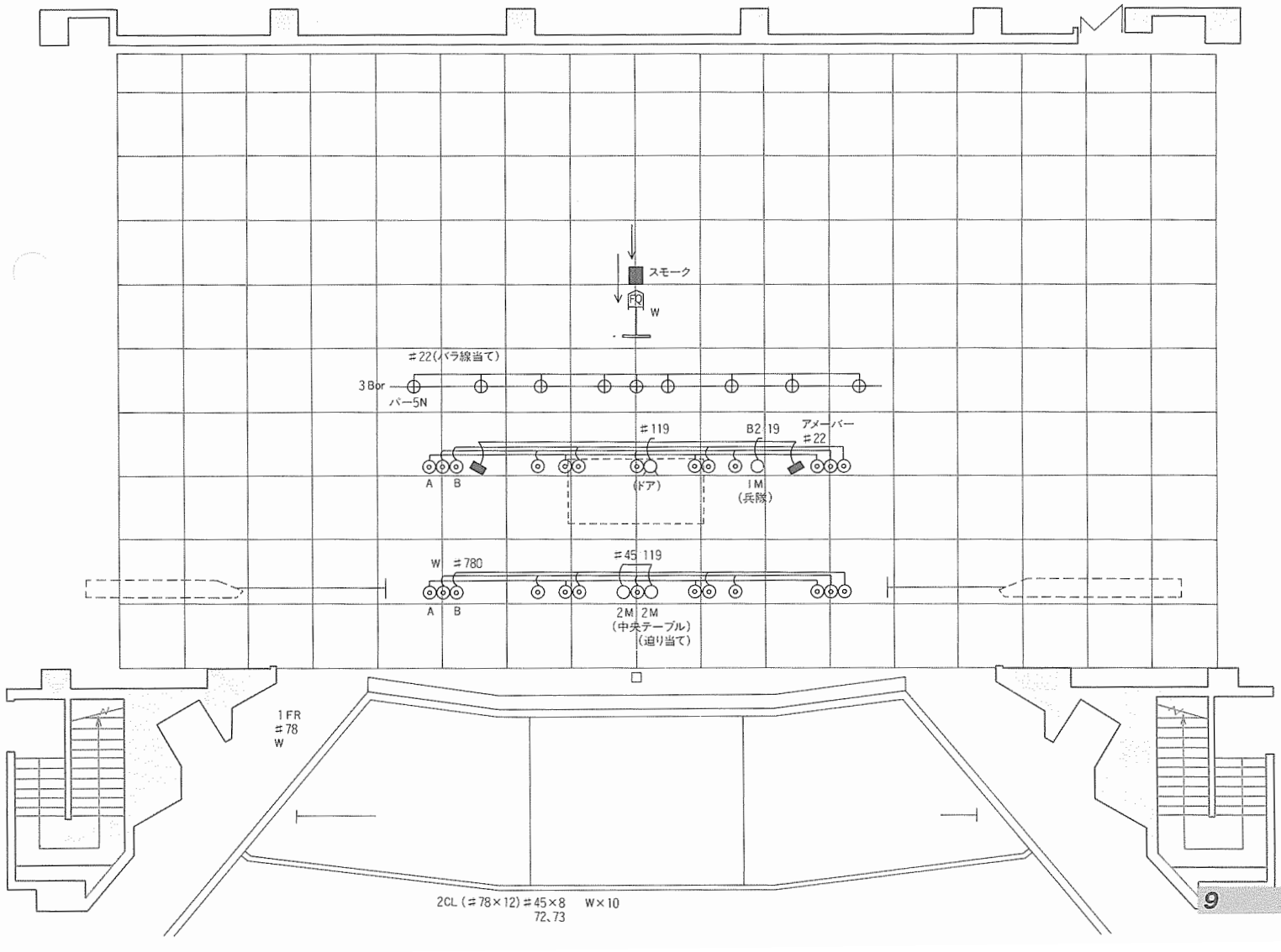
こうした資料を提出してくれた学校は他にもあったのですが、その表現が「不安感を漂わせる赤を基調に」「吸い込まれるような透明感のある青」といったように、あるイメージを伝えようとしているのはわかるのですが、実際にどうしたいのか具体的な対応に困るものもありました。

秩父農工高等学校の場合は、装置のドアに当てる単独サスについても、生明かりの指定と「ドアのところに当てる。役者が立

図5　「照明当り説明書」（秩父農工高等学校）

NO.	名　称	ゼラ	説明（イメージ、大きさ、組う物、その他）
①	地明り ① 1AL 11～20 2AL 2CL. 66～70	#W FL 55	地明りはなるべくしぼりにして、時がりを作るようにする。※あたり図参照
②	A. 24. 25 地明り 2CL ② 72. 2	セピア色 #45	〃　昔っぽいイメージ。
③	B 27. 28 地明り ③ 2CL 71 FL 46	青、薄青 #780	〃　青の方は不気味なイメージ。薄い青は電気を消したイメージで。（光量で調節）
④	ドア単 2AL ② 94 （バンドア付）	#W	ドアの所に当てる。役者が立った時、顔がよく見える高さ。大きさはあまり大きすぎない。
⑤	バラ線 （10KT） 3B、109.	赤、#22	不気味なイメージ。支柱と支柱の間のバラ線にトップから当てる。
⑥	2AL ③ 木漏れ日 98	赤、#22	盆全体に血が飛び散ったイメージ。エリスばっぐ。
⑦	テーブル単 90, 91. 1AL. ①② （2KT）	セピア色 #45	昔っぽいイメージで。テーブルを囲んでいるアンネー家も入りきる大きさ。

図4　「今日もいい天気」（秩父農工高等学校）仕入図



った時、顔がよく見える高さ。大きさはあまり大きすぎない」という説明があり、その意図は即座に伝わります。

その他、この学校が提出した資料で興味深かったのが、「音響・照明オペレートフェーダ表」(図版6)です。当初、調光操作は私たちプロがやることになっていましたので、キッカケや微妙なフェーダの立ち上がりを指定したキューシートのようなものとして提出されました。折れ線グラフのようなフェーダ表というのを見たのも初めてでしたし、こういう書き方が有効なのかどうかは実際に使う機会がありませんでしたのでわかりませんが、細部までおろそかにしない芝居に対するこだわり、自分たちの作品を完璧に創り上げるためのさまざまな工夫のようすが伺える資料の一つでした。

調光操作に取り組む

今回、調光室での操作も基本的に生徒たちにやってもらいました。

秩父農工高校の資料でも触れましたが、どのキッカケで、どうフェーダを上げていくのか、その微妙なニュアンスまで把握しているのは、何度も稽古を重ね、芝居づくりに携わってきた生徒たちです。

実際に芝居を観ていない私たちが、台本上で打ち合せをして操作をしてもうまくいく方が不思議です。仮に、隣から指示を出されて操作しても、キッカケが出た時には、すでに遅いことが多いものです。

やはり、その芝居を最初から創りあげてきた生徒たちが、自分たちの思いを込めてフェーダを上げる方がより確実ですし、納得がいく舞台になると思います。

ただし、今回の会場のようにたくさんのフェーダを備えた操作卓での操作は、簡単にできるものではありません。そこで私たちの仕事は、生徒たちがこれまでやってきたことを、普段と同じように落ち着いてできるように、環境を整えてあげるということでした。

たとえば、調光室でたくさんのフェーダを見て戸惑っている場合はこんな具合です。

スタッフ「学校ではどういうふうにやってきたの」

生　徒「学校にはフェーダが6本しかありませんでした。120本もあると、私、わかりません」

スタッフ「それじゃ、6本にすればできる？」

生　徒「できます」

スタッフ「6本のフェーダは、学校ではどうなっていたの」

生　徒「1本が地明かりの明るい方、もう1本が地明かりのブルー、それからホリゾントの明かりに、サスが一つと…」

そこで、6本のフェーダーで操作ができるように、グループに組んであげるわけです。

そこまでの段取りをつけてあげて、後は学校でやった時と同じように操作をやってごらんと、生徒たちにまかせるのです。

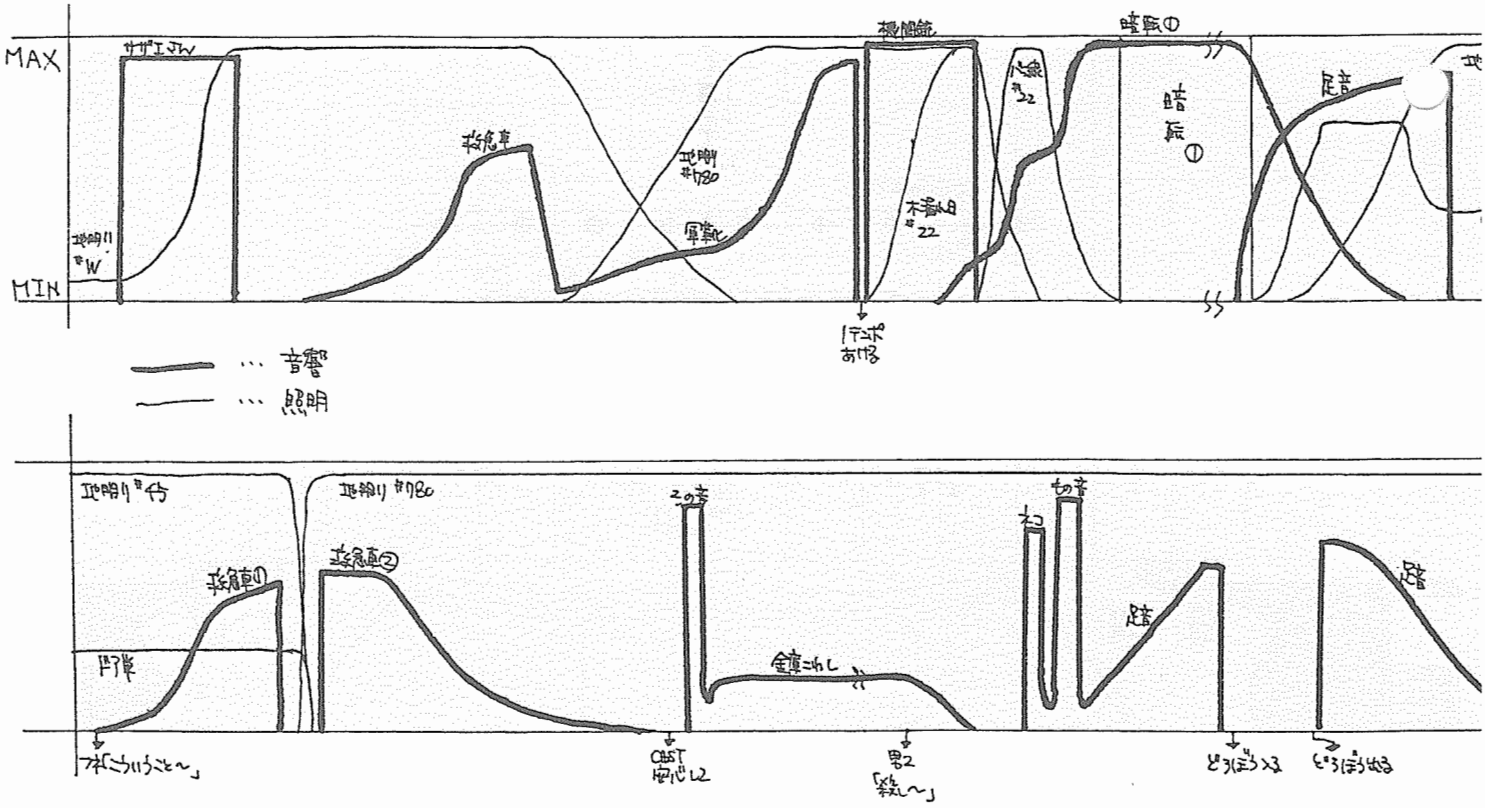
また、3段のフェーダを自分たちで組んで操作ができるという学校もありました。その場合は、そばで見てあげながら生徒たちにまかせてしまいます。

生徒たちは調光室に入ってきただけで、不安で、緊張しています。それを、こちらが難しい顔をして、きつい言い方をしたら、余計に混乱して訳がわからないようになってしまうでしょう。

まずは、生徒たちがそれまでどんなふうにやってきたのか、どこまでできるのかということを聞き、これまでやってきたことを同じやり方で再現できるように整えてあげる、それが私たちの仕事だったわけです。

生徒たちがフェーダを握っていましたので、観客席には気づかれないような小さなミスから、調光室で思わず声をあげたくなるようなミスまで、いくつかのミスもありました。

図6 「音響・照明オペレートフェーダ表」



キッカケをミスしてしまって、落ち込んでしまったり、泣きそうになってしまったりと、調光室には舞台以上のドラマがあったともいえそうです。しかし、緊張しながら、真剣に調光操作に取り組んでいる生徒たちの姿を見ていると、とてもうらやましいものがありました。

仕事を終えての感想

舞台照明を通して生徒たちに接していると、照明についてよく知っている生徒、あまり知らない生徒などさまざまでした。普段、活動している学校の照明設備についても条件はかなり異なっているようです。

従って、私たちの対応もそれぞれの生徒に合わせて、どうすればその生徒が普段通りに生き生きと照明づくりに携わっていけるのかということを基本に置いて仕事を進めていきました。

しかし、せっかく打ち合せから始まって、明かり合せ、本番の調光操作と、生徒たちと一緒に舞台照明の仕事をしたわけですから、もっといろいろな話ができるような時間的な余裕が欲しかったなと思います。

どんな考えでその明かりをつくったのか、色はどういう効果を狙って選んだのか、また、普段の活動では舞台照明についてどんな勉強をしているのか。そうした話を聞き、アドバイスをしたり、私たちの考え方を参考として話す機会が持てたらと思いました。

また、舞台照明についての基本的な言葉をもう少し知って欲しいということも感じました。

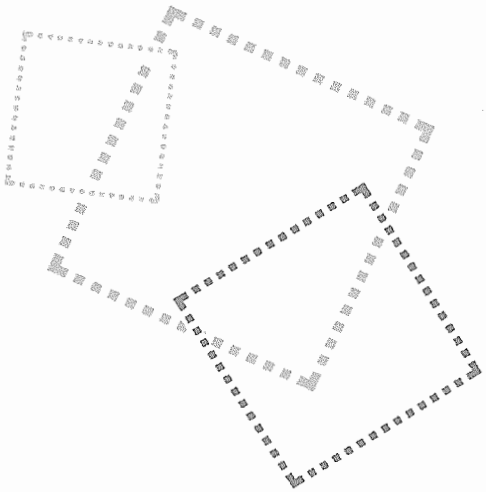
たとえば、シーリングライト、ホリゾントライト、フロントサイドライトといった照明設備が会館のどの辺にあって、どんな明かりをつくるために使われるのか、あるいは地明かり、タッチ明かりというのはどんな明かりで、どんな役目があるのか。そうしたことを知識として持っているだけでもずいぶんと違います。打ち合せの際にも、もっと話をスムースに進めることができますし、お互いのコミュニケーションもより確かなものになるでしょう。

最後に、大きな会場での上演ということで、生徒たちにとっては空間の大きさや距離感の違いを把握するのにとまどいや難しさがあっただろうと思います。

舞台照明の面でも、たとえば学校ではボーダーライト１本で充分だったものが、同じ明かりの状態を大きな空間につくる場合は、もっと光量が必要になってきます。また、色の選び方についても、小さな空間では支障がなかった色でも、空間が大きくなり客席が遠くなると、その色では顔が暗くなり観客にとって観づらい状態になったりします。

そうした場合、空間に合わせた照明の変更も必要になってきます。

空間の違いによって生じてくるさまざまな問題。これらを理解し、クリアしていくことは大変なことですが、そうしたことを通して、また舞台づくりの奥深さや魅力を実感してもらえたらと思います。



BOOK REVIEW ブック・レビュー

舞台・テレビジョン照明　実地編Ⅱ

照明の操作から制御へ

――光による劇的空間を創るために――

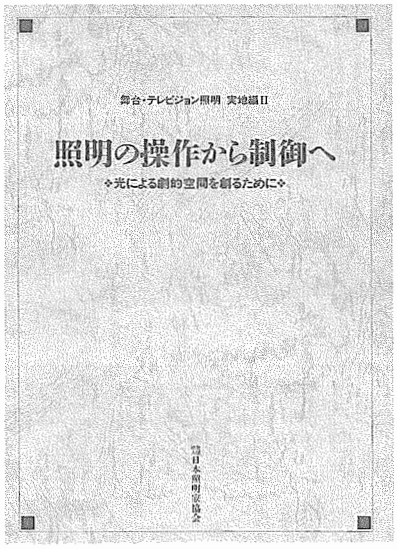
編集／発行＝社団法人　日本照明家協会
定価＝2000円（消費税込）

（社）日本照明家協会から「舞台・テレビジョン照明　実地編Ⅱ　照明の操作から制御へ――光による劇的空間を創るために――」が出版されました。

これは、舞台やテレビ照明の仕事に携わる人のための手引書として編集されたもので、「調光操作と照明制御」をテーマにさまざまなタイプの操作卓の機能と取り扱い方が具体的に解説されています。

ハイテク技術の導入による性能や機能の飛躍的な進歩、また機種によって異なる操作方法など、照明の現場はより複雑化していますが、そうした問題を整理し、調光操作についての全体像を把握するために最適の内容となっています。

また、図版や写真を多用し、実地を中心にしたわかりやすい記述になっており、舞台、テレビ照明に関心のあるアマチュアや学校演劇の関係者、またホール、エンターテイメントなどの施設の技術関係者に充分に理解できる内容になっています。



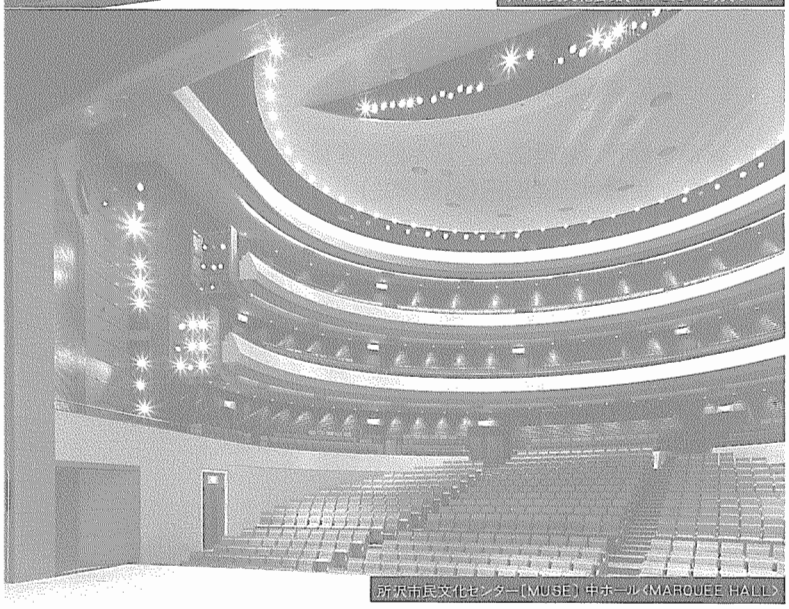
目次内容

Ⅰ　調光と操作についての基礎
Ⅱ　負荷回路を組み合わせる
Ⅲ　プリセット調光操作卓
Ⅳ　調光から制御へ
Ⅴ　信号伝送
Ⅵ　デザイン情報を読む
Ⅶ　照明デザインの図形記号について
Ⅷ　照明制御のための技術用語

問い合せ先＝社団法人 日本照明家協会
〒169 東京都新宿区百人町1-23-26 ミナミビル
TEL.03-3363-7660 FAX.03-3363-7890

MARUMO LIGHTING SYSTEM
あなたの街にMARUMOの光…
PROJECT NEWS

小平市民文化会館[ルネこだいら]大ホール


所沢市民文化センター[MUSE] 中ホール〈MARQUEE HALL〉

市民が気軽に集い、身近かに優れた舞台芸術と親しみ、さらには地域における市民文化創造の拠点として活用できる新しい会館・ホールが、全国各地に次々とオープンしました。文化都市づくりの中核となるこれらの施設の大きな特徴は、使用目的を明確に設定したコンセプトに基づき、いくつかのホールが併設されていることです。

クラシックコンサートの醍醐味を堪能させてくれる本格的なコンサートホールとしての大ホール。演劇やミュージカル公演に最適な規模を持ち、充実した設備・機能を備えた中ホール。講演会や小規模な音楽会など、多様な利用が期待される小ホール。

それぞれ独自のスタイルと機能を持ったこれらのホールの誕生は、より豊かな文化活動の展開に大きな力を与えてくれます。

MARUMOはこうしたホールづくりにあたって、蓄積されたノウハウと最新の技術を駆使し、舞台芸術から生まれる感動と創造の喜びに鮮やかな光を注いでいきます。

小平市民文化会館[ルネこだいら]
東京都小平市

■大ホール
- 設備容量　3φ4W600KVA
- 照明操作卓(マリオネットⅡ型調光操作卓)
  記憶シーン数　1000シーン

■中ホール
- 設備容量　3φ4W240KVA
- 照明操作卓(マリオネットⅡX型調光操作卓)
  記憶シーン数　500シーン

■レセプションホール
- 設備容量　3φ4W120KVA
- 照明操作卓(プレーネット調光操作卓)
  メモリーパネル　25シーン×2場面

所沢市民文化センター[MUSE]
埼玉県所沢市

■大ホール〈ARK HALL〉
- 設備容量　3φ4W300KVA
- 照明操作卓(マリオネットⅡX型調光操作卓)
  記憶シーン数　500シーン

■中ホール〈MARQUEE HALL〉
- 設備容量　3φ4W360KVA(舞台床部)
  3φ4W540KVA(舞台上部)
- 照明操作卓(マリオネットⅡ型調光操作卓)
  記憶シーン数　1000シーン

■小ホール〈CUBE HALL〉
- 設備容量　3φ4W180KVA
- 照明操作卓(プリティナ型調光操作卓)
  記憶シーン数　500シーン

富士市文化会館[ロゼシアター]
静岡県富士市

■大ホール
- 設備容量　3φ4W750KVA
- 照明操作卓(マリオネットⅡ型調光操作卓)
  記憶シーン数　1000シーン

■中ホール
- 設備容量　3φ4W500KVA
- 照明操作卓(マリオネットⅡ型調光操作卓)
  記憶シーン数　1000シーン

■小ホール
- 設備容量　3φ4W300KVA
- 照明操作卓(プリティナ型調光操作卓)
  記憶シーン数　500シーン

松戸市文化会館[森のホール21]
千葉県松戸市

■大ホール
- 設備容量　3φ4W600KVA
- 照明操作卓(マリオネットⅡ型調光操作卓)
  記憶シーン数　1000シーン

■小ホール
- 設備容量　3φ4W450KVA
- 照明操作卓(マリオネットⅡ型調光操作卓)
  記憶シーン数　1000シーン

MARUMO LIGHTING NEWS

●発行――――丸茂電機株式会社
〒101 東京都千代田区神田須田町1-24 ☎03(3252)0321(代)
●編集責任者――――丸茂正俊
編集協力――――小川昇舞台総合研究室　レクラム社
●マルモ・ライティング・ニュースは、無料で皆様にお届けしております。ご希望の方は、丸茂電機(株)までお申し込みください。尚、転勤、転居などで住所変更の場合は、その旨ご連絡ください。

●このニュースは弊社からお届けします。